

大の教訓を與へた。

此れから再び白川を渡りて、高麗門なる高田露君の墓に至つた。君には若干、人傑の資稟があつた。但だ不遇にして、大に其の力を伸ばすを得なかつたのは、天耶、人耶。眞に同情に禁へぬ。熊本政友會の今日ある、君の苦節力行に負ふ所、多大であらう。轉じて衆阪止水先生の墓に至る。先生は予が幼時の師にして、予に實踐的平民政義を誨へたる一人だ。此處には同門の一人、坂井鶴庭君、先づ在りて、予等を待ち受けてゐた。

此れから北岡細川侯邸に名刺を投じ、萬日山なる宗像政君の墓地に至れば、花岡山を中心とし、遙かに佐々克堂の墓と相對す。熊本に於ける近代の兩雄、各其の所を得たりと云ふ可く、又た各自の機縁淺からずと云ふ可しだ。

車を旋して、迫君の習靜堂に至れば、夫人令嬢を始め、渾家總掛りの驩迎であつた。此處にて一浴し、迫君、及び牛島夢堂、坂井鶴庭、飯星忠八、其他舊衆阪、行徳の門下生等諸氏と與に、純乎たる熊本料理の馳走に預つた。座中俗談なく、熊本名物の政黨競争話柄も、一切抜きにして、如何にも快活なる一座であつた。例の如く御馳走を以て始まり、揮毫を以て終つた。研屋旅館に入つたのは、午後十時、既に櫻山同志會の石原君及び青年諸氏が

宗像政君の墓

坂井鶴庭君の墓

迫君習靜堂の晩餐

研屋旅館

猫に祟られ一晩

待ち受けてゐた。對談一時間、神風連の當時より現代の事に及んだ。予は神風連には、多大の同情を有するものだ。

大正十一年五月十二日午前六時、研屋本店に於て。

*

*

*

*

*

*

同日九州新聞編輯長池田朔鳳君を、病院に訪うた。君は昨年朝鮮、滿洲にて、予等一行に加はりたるもの。今や盲腸炎を病んで、臥床の上にあり。同病相憐むとは此事である。

熊本に於ける第一日

五月十二日。昨夜は洗馬川を隔てゝ、どんちやんぐわんちやんの大騒ぎにて、夜半に至り。夜半よりは、家の軒下に、どら猫の喧嘩にて、又た大騒ぎと相成。人間の猫と、正眞の猫と、一夜猫に祟られ、殆んど安眠を妨げられた。

*

*

*

*

*

*

九州日々
社訪問

朝來原田代議士や、高橋市長の訪問を受け、迫市會議長の案内にて、九州日々新聞社を訪

大廣間の
談話

福岡日々
の支局

九州新聞
社を訪問

夕佳亭の
墨跡

うた。該社先頃二回の失火を経、今や三層の高閣は、巍然として新たに成つた。所謂る焼け太りとは此事だ。九州日々は、九州に於ける新聞の老舗で、其の勢力は、鹿児島の一部、福岡縣の一部、宮崎、佐賀、長崎、大分の一部にも及んでゐる。即ち九州第一流新聞中の唯一ではないが、其の一である。予等は限なく視察し、三階の大廣間に於て、山田社長の前に座じ、一場の談話をした。此は該紙の愛讀者の一人として、その誼に酬ゆる爲であつた。轉じて福岡日々の支局を訪うた。局長村上典吾君は、嘗て吾社に在り。明治廿五年選舉大干渉の時には、予の護衛として、玉名、天草、葦北、人吉等を、故山田翁、故栗原君等と與し、遑々如として奔り廻りたる一人だ。相見て互ひに舊態の改りたるに驚いた。轉じて九州新聞社を訪うた。社長高木代議士は、舊友の一人だ。主筆伴君は舊門生だ。該社は新興の勢もて、過日五百坪餘の敷地を購ひ、既に新築の設計圖も出來てゐる。予は高木社長の説に應じ、『萬古應爲西海鎮阿蘇山色碧嶙峋』の二句を書した。

此れから長崎伊太郎君の夕佳亭に赴き、肥後先哲の墨跡を見た。夕佳亭は、熊本には不似合の好幽莊だ。市井隘巷の中、此の『綠樹重陰蔽四隣。青苔日厚自無塵』の小天地あるは、寧ろ不思議と云ふ可しだ。況んや主人の好事なる、一石、一本も、其のゆかしき歴史

あるものに於てをやだ。

逸品多々
縣立圖書館の書籍

幽齋公、三齋公、銀臺公は勿論、秋玉山、米著、圓朱陵、墨渝浪、中瀬柯庭、數靈菴、同孤山、其他の墨跡、何れも逸品が鮮くなかつた。肥後の文學は、寶曆年間が、恐らくは其の黃金時代であらう。此れから縣立圖書館を見た。元田、辛島、小山諸家の委託書籍もあつた、小山氏の委託書籍中には、予の祕藏したる古活字の太田牛一著天正記と、同一本もあつた。秋玉山が銀臺公に江戸參觀の途中侍講したる、荀子もあつた。予は秋玉山が、銀臺公に侍講したる韓非子を藏してゐるが、如何に彼等君臣の講學に熱心であつたかは、其の毎冊奥付の跋語にて、知ることが能ふ。或は舟中にて、或は旅宿にて、苟も餘閑あれば、其の機會を逃しなかつた。

予は大正八年病後、大聲を發して演説することが、殆んど不可能となつた。然も旅行する毎に、講演の相談を持ち掛けられ、之を理るに頗る當惑した。這回も隨處に此の厄難に出会つた。足一たび熊本縣に入りて、殊に酷だ敷を覺えた。然も熊本には、二十三年振りであれば、平に斷ることも出來ず、さりとて不可能の事は、何處迄も不可能だ。故に單に教育家諸君に限りて、鄙見の若干を開陳することとした。

病後不可
能の演説

教育家に
限り諭話

乃ち明麗館にて、茶話會が開催せられた。中山知事、古川理事官等も參會した。講話の大要は、一言にして云へば、日本の教育家は、先づアングロ・サキソン民族の催眠術から、醒覺せよと云ふに他ならぬのであつた。

大正十一年五月十三日午前六時。

大江の舊宅

大江の舊宅を訪ふ
元田先生

五月十二日午後四時半、明午橋を渡り、白川町を過ぎ、予が大江の舊宅を訪うた。此處には今ま親戚河田氏が居る。

古き話であるが、明治三年ト居の當時は、野原の一軒家であつた。隣家は約二町餘を隔てたる、元田生の邸であつた。此處に先生の塾があつた。予等のト居の際には、明午橋は架設中であつた。明治三年午の歳に出來たから、明午橋とは名づけたのだ。當時予は八歳で、元田先生も未だ上京せられず、寛閑の野に、老書生として、子弟を集め、之を訓教してゐられたのだ。予も亦た先生の塾に學んだ。予が先生の門人と稱するを得、自ら不肖を掲ら

す、諸同門の先進に推されて、先生の碑文を草したのは、以上の理由からであつた。

然るに今や予が舊宅は、市街の真中となつた。予が宅地を中分して、大道が貫通した。其の兩側には、町家が櫛の歯の如く立ち並んだ。大江義塾の跡は、今や見る影もなかつた。但だ當時を語るものは、明治六年 明治天皇熊本行幸の際、特に御料の爲めに建てたる一部を拂ひ下け、淇水翁の書齋としたる一室と、予が起臥したる二階と、或は講堂となり、或は教室となり、最後には予の書齋兼居室となり、此處にて『新日本之青年』や、『將來之日本』を著したる一室とのみであつた。然もそれよりも予になつかしかつたのは、亭々として天を衝く椎樹と、西洋梓樹であつた。前者は庭樹として、平たく摘み付けてあつたが、予が其の新芽を伸ばしたる結果、今や四十餘年を隔て、斯く成長し、其幹も殆んど合圍となつた。如何にも雄大の樹だ。西洋梓^{アカシア}は、新島先生が、其の種子數粒を書翰袋の中に入れ、淇水翁に、米國から齎らし來りて贈られたもの。今や劉立德門前の桑樹も啻ならず、殆んど椎樹を凌いでゐる。流石に米國流の帝國主義を發揮してゐる。樹已に然り、況んや人をや。多愁の桓司馬たらざるも、焉ぞ低徊せざるを得んやだ。

當日は熊本、及び附近に於ける予の親戚は、悉く河田家に集まり、前記予の書齋にて、晚

を遠望

其の翠色嵐光を望んだ。和尚の『截斷人間是與非。白雪深處掩柴扉。當軒裁竹別無意。鵠待鳳凰來宿時。』の一首は、予が尤も愛誦する一だ。

八方嶽

斯くて予等は菊池の諸有志、及び八方嶽に別を告げて去つた。八方嶽は豊筑の境に接し、菊池郡中の高山で、海拔一千一百餘米突、所謂る『つくしなる八方が嶽の麓には、鬼とりひしぐ武士はすめ』とは、予等が幼時より記憶したる所で、愛すべき山だ。

大正十一年五月十六日午前六時。

大慈寺及び木原不動尊

五月十五日正午、予等は菊池正觀寺に於ける午餐を辭し、熊本市を通り抜け、午後一時半、川尻大慈寺の客殿に於て、サンドウイッチを喫した。南北相距る八里、是亦た文明の賜だ。

大慈寺も亦た始めて見舞うた。此れは大智和尚の師、道元禪師の高弟、寒巖和尚の開基だ。和尚は御鳥羽天皇の第三皇子で、順德院の弟で、入宋の名僧だ。此處にも若干の古文書がある。後奈良天皇の勅額の一幅と、寒巖和尚の自畫贊とは、最も見る可きものであらう。

寒巖和尚

の開基

川尻の大慈寺

最も見るべき古文書

隨處に蛇行の跡

木原不動尊と顕彰會の歴々

清正所持の鐵砲

六天宮の特別建造物

但だ自畫贊は、頗る破損してゐる。兎にも角にも此寺は堂々たるものだ。門前の永仁十年の年號ある塔の如きは、實に當時を物語るものだ。而して禪寺に相應して、掃除等も能く行き届いてゐる。予等が寒巖和尚の墳を拜する際、偶々その礎石の間より一疋の蛇が出来つた。此邊蛇の名所とも申す可き歟、參道の軟沙には、隨處にのたりたる跡が、鮮明に印せられてゐる。文字には蛇行と能く書くが、蛇行の痕跡は、自から美術的に出來てる。此れは蛇が沙風呂に入るものだと、同行の藤澤君は説明してくれた。大慈寺には即今澤木和尚ありて、年少氣鋭、大に宗風を振うてゐる。

此より鎮西八郎の居城を構へたと云ふ、雁回山の麓に至り、木原不動尊に詣した。此れは傳教大師一刀三禮の作と傳へられてゐる。熊本には、木原不動顯彰會ありて、今や鑄方中將や、憲政、政友兩黨の領袖株、何れも其の發起人で、當日は歴々の諸名士相會し、自動車數臺相集まり、大いに村民を驚かした。此所にて、清正の所持したる南無妙法蓮華經の文字を、金銀にて象眼したる鐵砲や、小西行長より與へられたる刀を見た。何れも舊家藤井氏の所藏だ。此處から山逕を辿りて、六天宮に詣し、特別保護建造物なる、永正年間の造營に係る樓門を見た。此から一氣に熊本に還り、先づ面上三斗の塵を洗うた。・

路の
塵埃名物
熊本道

草津屋餅
と餡焼

概して熊本附近の道路は、火山灰にて、其の塵埃の滾々たるは、満洲の道路も、啻だならずである。特に川尻往還を以て甚だしそう。此れが熊本名物の一だ。予等は幼時より、此の塵埃に慣れたれば、今更驚く可きではないが、然も其實は驚かざるを得なかつた。そは自動車が、數臺相連りて、大仕掛に掲げたからだ。三斗は形容辭だが、その實一升位はあつたであらう。但だ此の塵埃滿目の道路も、亦た何となく古への熊本を偲ぶたよりであつた。途中にて車を停めて、川尻なる草津屋餅を購うた。此れは水前寺の餡焼と共に、予等が幼時から、名物として珍重したる一であつた。

* * * * *

夜は白川端なる高木代議士の邸に、晩餐に招かれた。君は曾て明治二十五年選舉大干渉の際に、予等の歸東を送る可く、祖宴を張つた。今や當時を回想して、之を再びするのだ。然も當時の席に列したる多くの先輩友人の大半は、殆ど故人となつた。予は松山翁、原田代議士、迫市會議長、主人公その他の諸君と、往を談じ、來を語り、夜の深くるを忘れた。而して諸君に強要せられて、若干の揮毫をなし、最後に寄合書よなごみしょをした。諸君皆な能筆、予は自ら強顔なるに作ぢざるを得なかつた。

高木代議士邸の晩餐

大正十一年五月十六日午前七時、小雨懃々たる洗馬川畔に於て。來客雜沓、漸く寸閑を偷んで此文を綴る。

兼阪止水翁の舊宅

熊本滞在の最終日

五月十六日は、熊本滞在の最終日だ。予は如何に此の一日を消費すべき乎に就て考へた。

* * * * *

先づ藤崎神社臺に上りて、七株の巨樟を見た。此れは清正公築城の頃の樹と唱へてゐるが、恐らくは其前のものであらう。少くとも彼等は、足利氏以來の歴史を闇したものであらう。喬木の都市、及び其の附近に在るは、國の誇りだ。予は此處に參集せられたる父老諸君に、其の護持の急にす可からざる所以を懇談した。

轉じて天福寺を訪うた。千竿の修竹、菴を廻ぐり、青苔階に上らんとす。菴外には、迫靜巖等の寄進にかかる三十三箇所の觀音がある。

幽徑を辿りて成道寺に至る。此れは西山の一角に於ける、清泉の迸り出づる名所だ。寺は

成道寺

藤崎神社
の巨樟

天福寺

成道寺

先生遺愛の藏書

松山翁の熊本人物

た。然も人間の運命には、勝軍もあれば敗軍もある。失敗の教育に至りては、諸君は未熟だ。諸君は須らく政友會を他山の石とし、其の苦杯を満喫し、能く逆境に處する石上三年の修業を積まれたし。國家の爲めに、強き政府黨も入用だが、更により強き反對黨が必要だ。予は今日に於ては、寧ろ反對黨の强大ならざるを憾むと云うた。先生の邸には、遺愛の藏書が澤山ある。中にも錢舜舉の作と稱する蹴鞠圖の小幘の如き、又は細川忠興夫人明智氏一秀林院一の嫁入道具の一なる、九曜と桔梗とを、交々金箔にて描きたる蒔繪の書・棚の如き、眞に古を懷ふの情に堪へざらしめた。

予等はその附近なる、松山翁の宅を訪うた。翁はその昔、敬神黨より相愛社の領袖の一人となり、今尚ほ熊本政友會長老の一人である。其の談論の口を衝いて出づる、元氣の矍鑠たる、とても七十餘の老翁とは想はれなかつた。君は俗骨ある仙人でなく、寧ろ俗人にして仙骨を帶ぶるものだ。中正の論、中庸の道は、君が自ら就くを屑とせざる所だ。君は寧ろ極端に奔るを得意としてゐる。併し其中には、剛健なる常識が恒在して、其の一家の風を保持してゐる。君が如きは、現在熊本に於ける、名物男の一人と云はねばならぬ。最後には河島書店を見舞うた。此處の主人は、予の來るを豫期し、直ちに紙を展べて、予

屋沽らぬ本

揮毫より

の揮毫を需めた。三都を除けば、古書肆は全滅だ。熊本の河島書店の如きは、殘存の一だ。古書は驚くべく澤山ある。但だ慾しきものは、自ら藏書として沽らぬ。而して予には、其の出版したる高木紫溟翁遺稿の一冊を贈つた。予は世にも珍しき本屋がある、沽らぬ本屋とは、君の事であらうと戯れた。

夜は熊本人士の爲めに揮毫した。薄暮より翌朝の一時に至りても、尚ほ續々と出で來つた。今は生命が物种だと觀念して、筆を抛つた。而して臥床に入りたるは、五月十七日午前一時半であつた。

大正十一年五月十八日午前七時、雜客沓至、朝饗の催促急。熊本縣阿蘇内ノ牧に於て。

阿蘇登山の記(一)

愉快の事

五月十七日、今朝は熊本を去る日だ。淹留五日、足掛け七日、殆んど夢を見る閑さへ無かつた。予が熊本に二十三年振りに來りて、何よりも愉快であつたことは、政友、憲政兩黨の諸君が、隔意なく、予を取り扱うて呉れたことだ。此れは予が現在の政争に超越したる

態度を、全く識認して呉れた爲めであらう。

* * * * *

早發の見
送を感謝

追靜巖君
の高誼

午前五時五十分、熊本驛より宮地行の汽車に乗つた。午前六時前と云へば、見送りには禁止的時間だ。然るに拘らず、予及び妻の懇意なる人達が、見送り呉れたことを感謝する。予は此の機會に於て、追靜巖君に、一言の禮を述べたい。君は予が十一日著熊以來、其の公私多忙の身にてありながら、殆んど寸刻も、予の側を去らず、予等の嚮導者、案内者、紹介者として、其の最善を竭した。此れから阿蘇に於ける二日間は、藏原惟親君の受持となつた。惟ふに追君も、此の厄介なる荷物の受渡を了して、定めて一息嘘いたであらう。追令嬢は、予が第四女と略ぼ同齡で、予等夫妻のベットであつた。今更らの様に別が惜しかつた。

春竹、水前寺の各驛にも、舊識新知の見送人があつた。河田老夫婦とも、残り多き心地して、相別れた。併し一行の同勢多き爲め、頗る心強く感じた。一行は、案内者の藏原君は勿論、特に第一師範學校教諭角田政治君が、説明者として同伴した。それに高木、上塙の兩代議士、後藤、釘山の九日記者、元田九州記者、及び研屋本店主人と、予等夫婦、大内觸れの顔一行の顔

追氏令嬢

生であつた。汽車は大津往還に沿うて行いた。但だ山陽が『老杉挿道無他樹缺處時時見阿蘇。』と詠じたる老杉も、今は頗る貧弱となり、予が少年時代、崇美の感に打たれた記憶を、裏切つた。

立野驛にて下車し、研屋本店主人と手を分つた。君は予等を人吉に迎へ、阿蘇に送つた。予等が滯熊をして、圓滿ならしめたる骨折に就ては、君及び其の夫人に謝せねばならぬ。風は意外に冷たかつた。急に冬に逆行した感があつた。自動車にて戸下温泉を見舞ひ、櫻木溫泉に至つた。戸下は、白川と黒川との合流する所だ。黒川の上には數鹿流ヶ瀧あり、白川の上には鮎返り瀧がある。兩者何れも水力電氣を供給して、其の水量は復た舊時の觀なしだ。予は戸下、櫻木には、明治十六七年頃、屢々遊んだ。偶々獨行したこともあり、又た大江義塾生を率ゐて來たことも多かつた。當時に於ける予の詩作の大半は、殆んど此處で産出した。然も今來り見れば、殆んど舊時の面影さへも無くなつてゐる。櫻木溫泉小山旅館にて朝餐し、此處にて餘儀なく數紙をねたくつた。昨夜より今曉一時過ぎ迄揮毫し、亦た此の如し。揮毫の厄難も、此處に至りて極まる。せめて阿蘇大明神の冥助を仰ぎたいものだ。

又も揮毫
の厄難

戸下と櫻木

白川と黒川

立野驛に
下車

長陽村の小學校

玉垂にて

長陽村の小學校に至り、挨拶をした。小學生徒の途中出迎には、毎々恐縮するも致方が無かつた。此から馬車に乗換へて垂玉温泉に至つた。此の馬車の震動は、久し振りに支那旅行を想ひ出さしめた。進行する毎に、五尺の身體は、無遠慮にでんぐり返つた。然も鬼や角垂玉に著し、此處にて午餐を喫した。此地は三面巣急なる壁に圍まれ、單に西方に小溪を開きて、長野村に通じてゐる。此の絶壁より落下する瀑布眺め、山口夫人等の馳走にて、平野水を快飲し、サンドウイッチを快喫したる心地は、亦た格別であつた。戸下でも、樅木でも、垂玉でも、何れも温泉拜見のみにて、入浴しなかつた。登山前の人浴は、身體疲勞の虞あるが爲めだ。

此れより一行は、登山の武装した。予も護謨底足袋を用意したが、寧ろ靴の儘を擧び、唯だ行縢のみを著けた。

大正十一年五月十九日午前六時、阿蘇宮地町蘇門館にて。

阿蘇登山の記(二)

登山の武

阿蘇の登

難の垂玉

阿蘇の登

長陽村青

年好意

阿蘇の登

山と外輪

背後の展

阿蘇山中

の中岳

阿蘇山中

阿蘇登山は、坊中より上るを、最も安全且つ平易とし、垂玉より上るを、最も困難とした。同じく南郷方面から上るにも、湯ノ谷の方が近く、垂玉の方が遠くある。然るに予等は困難にして、且つ遠き方を擇んだ。此は何の故であつた乎、予自身は諒解し難かつた。熊本でも、途中でも、屢々行路變改を忠告した者があつた。然も藏原君が案内者であつたら、それに一任した。案の如く道は険岨であつた。

併し長陽村の諸青年は、予等の手を引張るやら、腰を推すやら、天然の困難を人力にて打克たしめた好意は、洵に忝けない。道傍には董艸が今を盛りに咲いてゐた。見渡す限り、樹木はなく、唯だ貧弱なる野原であつた。偶々躄脚花が咲いてゐた。色は薄紫であつた。俗に霧島と稱する種類だ。併し背後の展望は、實に愉快であつた。

* * * * *

元來阿蘇は、一大火口だ。その中央に阿蘇山がある。此は根子岳、高岳、中岳、烏帽子岳、杵島岳の五岳により成立つてゐる。予等が登らんとするは、其の中岳だ。此が即今活火山の魁である。此の諸山の南部を南郷谷と云ひ、北部を阿蘇谷と云ふ。予等は南郷谷の方面から上りて、阿蘇谷の方面に下るのだ。背後の展望は、南郷谷を見下すのだ。此の

景色は、登山者でなければ、諒解は勿論、想像も六ヶ敷くある。此の展望の妙は、唯だ逶迤たる裾野を、見下すのみでなく、屏の如く立て廻す外輪山を見るのだ。

大穴口の中屹立に五岳の牛合ノ峠を上下牛道愈急峻を上下牛合ノ峠と云ふ。阿蘇は元來、富士以上の大噴火山であつたが、今は周圍三十里に亘る大火口を造り、其の中に如上の五岳が屹立してゐる。此の大火口を環るのが外輪山だ。外輪山は擂鉢の端だ。阿蘇の五岳は、擂鉢の底から隆起して、擂鉢を、南北の二部に兩分してゐる。而して擂鉢の端が少しく缺けた所が、予等が今朝汽車から降つた立野である。此の大火口なる擂鉢の中には、三町十一個村があり、四萬三千の人口がある。予等は擂鉢の底から隆起する山の半腹から、此の南郷谷、及びそれを繞る外輪山の一部を展望するのだ。

* * * * *

道は愈々急峻となつた。烏帽子岳と御竈門山との峠谷を上下した。是れを牛合ノ峠と云ふ。それは南郷方面の裾野に放牧せられてゐる牛と、阿蘇方面の裾野に放牧せられてゐる牛とが、此處にて會合するからと云ふことだ。道は人造よりも寧ろ自然力の製造らしかつた。仕合には天氣が少しく曇りて、風が涼しかつた。下界では厄介な疾風も、山路には解熱の

牛道愈急峻 牛合ノ峠

下界の疾風も山路の清涼剤 梨・蕉實 清涼剤であつた。雨も時にパラパラやり出した。併し雨具を著くれば、直ちに止んだ。予等は谷間の一固より一滴の水さへ無き一巨石に腰掛け、携帶したる梨や、芭蕉實を喫した。此の梨は、人吉からの携帶品で、川野君の贈つたものだ。芭蕉實は清少納言の贈つたものだ。清少納言とは、迫君令嬢で、予が與へた綽號だ。

上塙代議士は、年少氣銳、支那四百餘州を踏破し、三山五岳、悉く其の轍痕を印したる漢だ。固より競争の範圍外だ。高木代議士、藏原君は、何れも肥脛で、第一にへたばる可き資格がある。然も肥後流儀の瘠我慢にて、決して弱音を吐かず、どしどし進行した。吾妻も亦た瘠我慢の仲間だ。諸人皆然り、予も彼は文句を吐く可きでなく、六十點位の成績で、漸く山上の茶屋に着いた。垂玉を發したのが、一時前十分であつた。此處に達したのが、四時に近かつた。

* * * * *

此から鎗岩、焼沙を踏んで、火口壁に立つた。風は強くして人を吹き倒さんとした。火口は瓢箪形で、第一火口から第五火口迄ある。予等は角田君の案内にて、恰も學生が教師の實地講義を聽くが如く、その講義を聽いた。角田君は阿蘇山の主と云ふべき程に、能

く阿蘇山を知つてゐる。若し君が博士になる日あらば、そは恐らくは阿蘇山研究の結果であらう。

阿蘇山の火口の底を眺めて、漸く地獄の實地見學が出来る心地がした。當日は登山には仕合であつた。山上には雨が降つたらしく、沙も濕つてゐた。その爲めに、偶々沙礫の面を撲つことあるも、目をつぶる程に甚しくなかつた。雲煙も殆ど霧れて、火口の底の底迄、隅から隅迄、見物することが出来た。斯くて山上の茶屋迄降りて、麥湯を快飲し、熟卵を快喫し、霎時息を入れた。

大正十一年五月十九日午前七時二十分、阿蘇宮地町蘇門館にて。

阿蘇登山の記（三）

是から阿
蘇谷下り

山上の茶屋にて、長陽村の諸青年、及び警官等に相別れ、互に萬歳を三唱して、彼等は再び南郷谷に下り去つた。一行廿五人、今や其の三分一を減じた。頼ひに牛と馬とが、茶屋に在つた爲め、藏原君の肝煎にて、牛を先頭とし、吾妻を馬に乗せ、阿蘇谷なる坊中に向

賽常磐

阿蘇谷展
望の妙極
まる

つて下つた。其の風態は賽常磐（セイセイハ）と云ふ可きであつた。此路の平々たる、降路とするは惜しき程であつた。予等は何故に此處から登らなかつたかと、自から悔恨する程であつた。

日暮蕭々、阿蘇群山の斜面を下る。阿蘇谷展望の妙、實に何とも名狀す可きでない。而して賽常磐が、牛を先頭とし、馬子に引かれて、覺束なく馬に乗りて行く姿は、殺風景と云はんよりも、寧ろ畫趣饒しと云ふ可きであつた。若し馬上の人（アマノヒト）が、蓬頭歛面の中婆でなく、白蓮女史（ホウレンヌシ）でもあつたならば、更に一段の風情を加へたであらうとは、衆評であつた。

斯くて坊中に著したのは、才かに人顔を辨する頃であつた。此處にて小學生徒や、諸有志等も、數時間予等を待ち受けたる由であつたが、餘りに下山の晩き爲め、彼等は立ち去り、唯だ諸有志の若干のみ殘留して、予等を迎へて呉れた。西巖殿寺に赴き、寶物展覽の豫定であります。但し、燭秉を秉りての展覽は、とても覺束なしと諦め、清茶を喫する間もなく、勿々辭しけり、西町なる藏原君の邸に入つた。邸は地方の農本的資産家の代表家屋で、何とも云ふ可からざる快感を與へた。君とは、明治三十三年政友會創立前後、東京に於て屢々相見たが、爾來杳として、互ひに存問を怠つてゐた。然るに今度は、阿蘇郡に於ける予等の東道主人となり、癒き所に手の届く様周旋せられたのは、君が舊友に酬ゆる誼とは申しながら

藏原君の
邸に入る

其の高誼

心入れの
馳走

ら、慚愧の至りである。

實は一椀の手打蕎麥にてもとの觸出しであつたが、蕎麥は固より、非常なる心入れの馳走にて、一行皆なその意外に驚いた。されば此からして、意外の出來事には、藏原君の蕎麥と云ふがよからうと、一同哄笑した。藏原君は予等の嗜好の何物であるかを偵知し、悉く之を備へられた。渴望——全く字の通り——してゐた平野水さへも冷してあつた。一行漸く元氣を恢復し、暗夜を衝いて内牧の塘下温泉に投じたのは、午後十時を過ぎてゐた。物寂しき田の中の畠路を、闇々たる蛙聲を聞きつゝ提燈を點して行く様は、田舎の嫁入とも云ふべき趣ありて、何となく詩趣があつた。温泉は田の中の一軒屋で、閑靜であるべき筈だが、内牧町の諸有志の來訪や何やにて、頗る賑はうた。藏原君は此處でも馳走の準備をしてゐたが、予等はそれよりも寧ろ睡眠を希望し、臥床にもぐりこんだ。而して精力主義の權化たる、同行の高木代議士さへも、閉口したものと見え、やがて隣室に來りて横臥した。此の如くして一行の阿蘇登山は、首尾よく了つた。

大正十一年五月十七日、徳富蘇峰阿蘇山に登る。此の一句は、蘇峰なる予の雅名に向つて、全く裏書をしたのだ。從來蘇峰が阿蘇山を知らぬ事やあると、屢々人に調笑せられたが、

蘇峰と阿

塘下温泉
へ投宿

馳走より
も睡眠

今や蘇峰阿蘇山を知るを得た。これは東道の藏原君、及び諸青年に負ふ所は勿論だが、待に阿蘇山通の角田教諭の賜だ。

大正十一年五月廿日午前六時、大分縣竹田増田屋にて。

阿蘇見物

五月十八日は、早起入浴、先づ内牧小學校に赴いた。内牧は肥後藩主が、參觀交代の通路で、今尚ほ昔の面影がある。此處に御茶屋がある。その御茶屋が今ま小學校だ。門構には、九曜の紋が残つてゐる。門を入れば、參天の老杉が駢立してゐる。此の御茶屋は、加藤氏時代には、加藤右馬允の居城であつた。加藤氏北門の鎖鑰は、此處であつたから、その重臣を、此處に特派したのであらう。城一變して御茶屋となり、御茶屋一變して小學校となる。然も其の城壕の如きは、尙ほ舊觀の若干を存してゐる。此れから阿蘇谷を大觀すべく、永倉峠に上つた。これは小國街道だ。峠には一大巨巖があり、遠目ケ鼻と稱してゐる。此處から見渡せば、阿蘇谷の形勢は、歷々として掌中にある。

永倉峠に
上る

阿蘇文化
及の順

阿蘇の文化は、外輪山、及びその真中に隆起する阿蘇群山の高地でもなく、窪地でもなく、其の麓なる斜面地に發生したらしい。山上は廣曠なる原野で、今尙ほ耕作に適せぬ。窪地は湖沼、澤地にて、後來漸く排水し、灌漑し、之を田畑とした、されば最初の住民は、窪地の上、山麓の沃土に向つて、先づ其の居を卜したであらう。山上より見下せば、阿蘇文化

普及の順序が、手に取る如く、一目瞭然の感がある。

角田教諭や、藏原君、其他の諸有志は、遠目ヶ鼻とは、其名雅ならざれば、是非予に命名せよと迫つた。予は之を辭したが、容易に聽き入れぬから、餘儀なく「大觀峰」では如何であらうと云うたら、一同掌を拍つて、大賛成と云ひ、即時に角田教諭は、其の新著書に之を發表せんことを約した。

阿蘇神社に參詣し、其の神庫の寶物を見、更らに阿蘇男爵家に赴き、其の家寶及び古文書を見た。曾て頼義が西遊の際、阿蘇家を訪うた時には、門戸閉鎖にて、一切何物をも示さなかつた由だが、今や予等は男爵嗣子阿蘇惟紀君の厚意にて、悉く其の秘庫を開放せられたのは、良に仕合であった。明の朱元璋—太祖—が懷良親王に贈つた蜀紅錦や、鎧丸の刀や、足利高氏—未だ尊氏と改名せざる以前—の譽文や、予が子供の時、吾父から聽きたる

阿蘇男爵
家の家寶
と古文書

遠目ヶ鼻
と改
名峰を達
と大觀峰

阿蘇家近
代の人物
惟治

西巖殿寺
の古文書

清正の阿
蘇へ蘇た
るに阿

諸寶物は勿論、鎌倉から南北朝時代以後の古文書を見た。古文書としては、南北朝時代が尤も豊富だ。而して近世的には、阿蘇惟治の神風論を、横井小楠先生が、添刪し、批評したものもあつた。惟治は阿蘇家に於ても、近代の人物だ。最初は横井先生と相好かつたが、後には陽明學を尊崇し、終ひに相容れなかつた。其の詠草には、佐佐木弘綱翁の添刪、及び批評があつたが、惟治は一々其れに就て意見を加へ、或は敬服と書し、或は評者の再考を求め、中には此の一句丈け敬服杯と書したのもあつた。其の一言一句の中に、自から當人の性格が活躍してゐる。

轉じて坊中の西巖殿寺に赴いた。此處にも數點の國寶がある。古文書も澤山ある。これは阿蘇神社に附屬する寺坊で、阿蘇神社に關する寶物の大部分と云はざるも、殆んど其れに應じるものがある。

抑當社退點(轉)之儀、先年太閤御所御下向之砌、郡中之者共、邪心を相構候儀、神主一人之科に究り御成敗候付而當社破滅候。彼邪心之者共、御成敗候上者、阿蘇大明神破滅不仕様可レ被_ニ仰付_ニ哉と、達_ニ上聞_ニ當社造營等並坊中をも取立、社領等可_ニ申付_ニと雖_ニ念願候、高麗在陣に付而押移候。然處太閤様御他界に依り、其志も無_ニ證候。然者爲_ニ冥加_ニ

豊國大明神を、當分領中へ瀧頂〔勸請〕可レ申覺悟候。今瀧頂〔勸請〕之事、成就の上にて、受ニ神明、其上を以、神領等をも可ニ申付候條、各相集、阿蘇大明神之勤行等、先規之姿を可レ有ニ勤行事尤に候。然時者、寺社居屋敷並沙彌一人宛之堪忍分、黒川村之内を以可ニ申付候間、各令ニ還住、少〔小〕庵をも可レ被レ結候事、肝要候也。

慶長四年十一月廿九日

清正 華押

長善坊

阿蘇大明神

寺社中

此の文書は、當時如何に秀吉の爲めに、阿蘇家が打撃を被り、而して清正より細川家を経て、再び恢復したかを知るに於て、十分なる暗示を與へてゐる。

大正十一年五月廿日午前七時、豊後竹田増田屋にて。

阿蘇家
消長

阿蘇大觀

迎宮地の歎

五月十八日の夜は、宮地にて、官民諸有志相集りて、予等の歓迎會があつた。予は概略左の通りの挨拶をした。

*

*

*

*

*

*

一面から見れば、阿蘇は天福地恵に貧しくある。阿蘇なる大火山は、今尙ほ大活動を逞うしてゐる。其の威力の及ぶ所、阿蘇一郡は固より、甚だしきは人吉邊迄も霧を降らしてゐる。陸には火山灰もて埋め、川には硫黃水を流し、今日に於ても、曠漠たる原野、耕作は勿論、植林さへも難くある。天は何故に斯く阿蘇人士を虐待するかと、疑はねばならぬ程である。
併し翻つて見るに、天は一方に惜めば、他方に與へる。今ま阿蘇人士の特有する天福地恵に就て見るに。

(第一) 他に比類少しき自然美がある。阿蘇山に登りて見ても、山その物には何等の奇はない。

火山と云ふ以外には、寧ろ平凡の感がある。一邱一壑の見からすれば、阿蘇には、瀧湘八

自然美少しき

阿蘇大活
動の威力
阿蘇人士
福地恵
特有の天
才

景と云ふが如き、箱庭的景色は見出されぬ。

阿蘇は造化の大文章と阿蘇の妙體は阿蘇全體隨處に温泉の湧出が如き、洪濤の逆捲き來るが如き、力ある大文章がある。阿蘇も亦た造化の大文章だ。之を實に美絶、麗絶、雄絶、壯絶、何とも言葉にて説明し難き快味がある。世には奇字なく、警句なく、一行一節の上から見れば、平々凡々だが、其の全體に於て、急潮の推し寄せ來るが如き、洪濤の逆捲き來るが如き、力ある大文章がある。阿蘇も亦た造化の大文章だ。之を妙義とか、耶馬渓とか、一邱一壑から見るものと比照するは、全く其の見當が違うてゐる。阿蘇の妙は、阿蘇全體である。阿蘇の風光を賞せんとせば、之を大觀せねばならぬ。

(第二)阿蘇は隨處に、温泉が湧出する。是れ亦た火山の賜だ。櫪木、湯ノ谷、垂玉、地獄、杖立、内ノ牧、奴留湯、其他あらゆる方面に、温泉が滾々として流れてゐる。若し其の設備を整美ならしめば、天下の浴客は、鐵道の開通と共に、期せずして來り會せむ。此の風景に、此の温泉あり、縱令國立公園の名なきも、其實は國立公園だ。

(第三)阿蘇に特有なるは、官幣大社阿蘇神社と、阿蘇男爵家である。此れは神武創業の當時に溯りて、他に類例少き歴史がある。今試みに阿蘇神社、阿蘇家、及び西巖殿寺の諸寶物を、一所に集合陳列せん乎。優に一個の博物館たる價値がある。若し古木保護が國家的

見地から大切なは、阿蘇家の如き故家保存は、猶更に大切であらねばならぬ。

同夜も亦
めた揮毫攻

以上はほんの其の要領に過ぎぬ。併し席上共鳴者も少くなかつた様だ。同夜も亦た揮毫攻めに遭うた。併し最早剩す所、此の一夕であるから、予もいやな顔をせず、成る可く諸君の意を満たすべく努力した。登山の翌日であるから、腰が立たぬかと思うたら、案外樂であった。是れも阿蘇温泉の特效であつたかも知れぬ。

大正十一年五月廿一日、別府日名子旅館にて。

阿蘇を去りて竹田に入る

五月十九日、今日は彌々熊本縣を離る、日だ。早朝亦た揮毫攻めに遭うた。此れから藏原君の案内にて、古城村なる國造神社に詣した。途中前方後圓の大古墳あり。又た其の陪塚とも見るべき、多くの古墳を見た。國造神社は延喜式に列し、俗に北宮と稱してゐる。宮地の北一里、其北に山を負ひ、阿蘇谷に臨んでゐる。惟ふに阿蘇家發祥の地であらう。先づ此

の山腹の地から、漸次宮地なる溝地に降下したものと思はる。此處にも二個の古墳がある。上御倉、下御倉、と稱してゐる。口は竈の口の如く、五間程匍匐して入れば、高九尺、上下左右石にて疊み、奥は幅二間、高八尺の切石がある。是を障子石と云ふ。其前に幅三尺、長七尺、高三尺の石棺がある。

此處には夫婦杉がある。婦杉は雷火の爲めに焼けた由なるが、夫杉は今尙ほ亭々として、天を衝いてゐる。目通り三十七八尺もあらう。種々の寄生木が、其の幹枝の間に繁生してゐる。確かに杉の中の巨人だ。樹齡は少くとも、千年に近いであらう。此れを見る丈でも、汗を絞りて来る價値はある。

予等は午餐の遅さへなく、午後二時過ぎ宮地より坂梨に至つた。坂梨には從來關所ありて、豊後より肥後に出入の人を改めた。園田翁、藏原君、高宮君、及び九州新聞記者元田君等相送りて、此處に至つた。而して諸君と坂梨峠の下なる牛王神社の老樹清蔭の下にて、手を分つた。諸君の好意謝す可し。特に園田翁が前日來周旋せられたのは、尤も感銘に禁へず。翁は予が幼時に於て、元田先生、及び竹崎先生の塾に於ける都講であつた。翁は當時より、能筆の譽高く、予も翁の手本を習うたことがある。後には元田先生の賓友として、東京

夫婦杉
杉の中の
巨人

坂梨にて
諸君と分
手

園田翁

夫人は乗
馬自身は
徒步

事實は扇
子の交換

に在つたが、今や棲遲、老を故山に養うて居る。地方には比類少き、聰明なる老學者だ。吾妻は馬上の阿蘇下山にて、自信力加りたるものと見え、又た馬に乗つた。予は井上九州新聞通信員に腰を推されて、徒步坂を上つた。十歩一休、三時過ぎに坂梨峠に達した。此處から阿蘇谷の展望は、又た一入であつた。予は井上通信員に、何も謝禮の品がなかつたから、延岡から携へ來つた扇子に、茶店の筆硯を借りて、若干の文字を書し、他日の記念として、之を與へた。井上氏は此の炎天に、扇子なくしては御迷惑ならんと、自から携へたる扇子を、予に與へた。此れで事實は扇子の交換となつた。想ひ起せば予が、大阪に坂なく、坂梨(無)に坂ありと書いたのも、三十三年の昔だ。

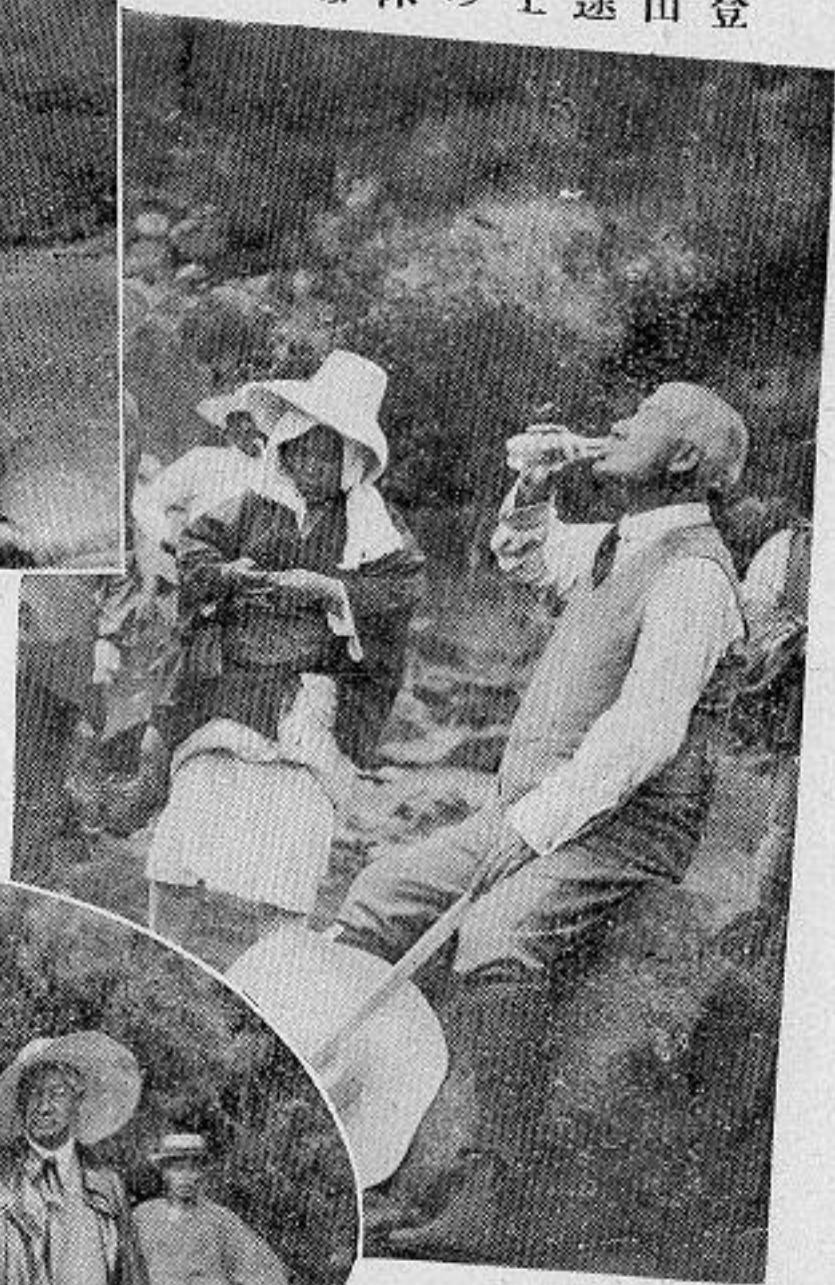
* * * * *

待ち合せたる自動車に乗つた時には、活き復つた心地した。五月三日鹿児島縣より熊本縣水俣に入つて以來、五月十九日阿蘇郡を出で、大分縣に入る迄、十七日間は、全く同郷諸君の厚意攻めにて、呼吸さへ出來ぬ體たらしくあつた。今や熊本縣を出で、實に一息嘘かざるを得ぬのだ。然も此の苦痛は愉快なる苦痛で、今尚ほそれが懇しくある。

憩休の上途山登



中途山登



登山途中の雨著

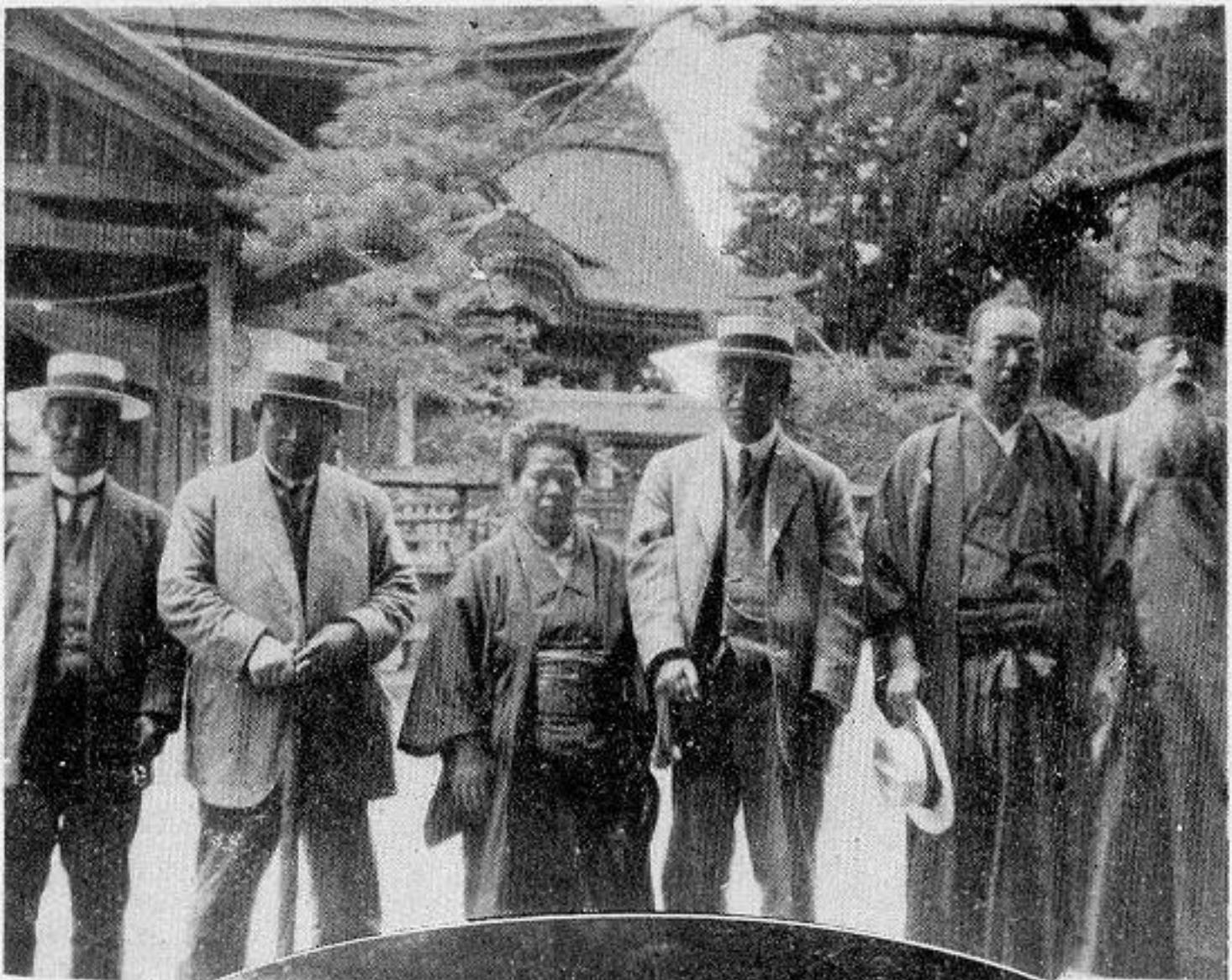


學人夫妻の後に立
てるは藏原惟祀氏



阿蘇山口の垂玉

前 社 神 蘇 阿
氏郎四第木高、妻夫人學、氏紀惟蘇阿、翁田園りよ右



手 分 の 梨 坂

鐵道及停車場
都頂市



圖地記遊州九

1:1,400,000

0 5 10 km

近附山蘇阿

1:700,000

0 1 2 km

